

おわりに

第4期自己点検・評価委員会は、大学院を中心テーマに据え、その実態を具体的に把握するべく、院生と教員を対象とする質問紙による調査を行った。各章において、調査による点検・評価がなされたとおりである。

武蔵野美術大学は、今現在重大な局面を迎えている。東京都が進める都道小平3・3・3号線（幅員28m）、その道路の敷地内横断により、移転しなければならない学科、研究室がある。問題はそれが単純にその工房、研究室を右から左に動かせば良いというものではなく、大学全体の将来を考えた移転にしなければならないことで、それに伴う新校舎の建築プランが、具体的に進行中である。その構想案の中にはかねてより懸案のデザイン系の大学院棟も含まれており、理念の適切性の中でも書いたが、この機会を利用して、新しい大学院像を考えるべきだと思われる。自己点検・評価委員会より学長、理事長に提言していくことは学生の声でもあり、これからの新しい大学院像における理念を構築していく上でも重要であろう。

現在、武蔵野美術大学の志願者数は5年前と比較しても大きく減少し、学生の質の確保という問題が起きている。これからの少子化や世の中の市場経済を考えたとき、それは現状にとどまることなく、ますます加速化するのではないかと危惧される。

そのような時代の中で、美術系単科大学ができることは、やはり美術を中心に社会に貢献する人材の育成しかありえず、その独特の視野に立った作家、デザイナー、研究者の育成、成果、いわば美術が持つ力をあらゆるメディアを通して発信し続けることであろう。

そのためには、優秀な学生の維持は大切な要素であり、専門課程に進んでいく、その研究を深化させていく大学院とそれに伴う研究機関の充実は早急に実現させたい喫緊の課題だと言える。都道小平3・3・3道路の問題を契機に構想中の大学院棟は是非実現してもらいたい。それも、今までのように各学科研究室が小規模の教室を割り当てられるのではなく、各研究領域が必要な研究スペースを考え、作り、大胆に活用してこそ大学院棟は有意義ではないかと思われ、そこでの研究、交流を通して新しい大学院は作られていくのだろうと思われる。

そして大学院改革は、たとえ学部の定員を減らすことになったとしても優秀な大学院の定員を増やすことでその分を補い、これからのさらなる少子化に対応しつつ、その教育環境を整えていくべきであり、とりあえず難しいと思われる指導領域の交流を深める共同スペースについての議論が、その領域の理想とともに語られる時、それは新しい形の大学院の将来が議論されることであり、新しい理念をつくるきっかけとなるのではないだろうか。

〈第4期 自己点検・評価委員会〉

委員長

水上 泰財 学長補佐（第1章担当）

副委員長

稲葉 直 企画部長（第5章担当）

委員

圓山 憲子 教務部長（第4章担当）

滝沢 具幸 博士後期課程課程長（第2章担当）

神野 善治 美術館・図書館長

田中 克明 通信教育課程課程長（第3章担当）

木村 修三 総務部長

羽生 龍彦 教務部事務部長（第6章担当）